

## 主 題：私たちは主を宣べ伝える 6

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章29-31節

## A. 神の恵みによる救い 19-25節

## B. 神の選びによる救い 26-31節

## 1. 「神の選び」 26-28節

神がコリントの教会のクリスチャンたちを救われたのは、自分には救いが必要だと思っていないだけでなく、イエス・キリストの福音を信じるだけでは不十分である、知恵が必要なのだ、いやこういったものが必要なのだと思っている連中に対して、彼らの間違いを悟らせ、イエス・キリストだけで十分なのだということを教え、彼らを辱めるためだとパウロは教えてくれました。そのことを考えた時に、今の私たちも同じです。イエス・キリストの救いを必要としないと思込んでいる人たちやイエス・キリストの福音を信じるだけでは救いなど与えられることはないと思っている人たちを辱めるために、彼らの間違いを彼らに悟らせるために、私たちは救いにあずかったのです。私たちは大変大きな責任を負っているということを忘れてはならないのです。

では私たちはどうやってそれを示すのか——。主によって変えられた人生を見せることです。私たちが主によって変えられたことを明らかにすることです。私たちは、このイエス・キリストの福音によってのみ、信じるすべての人が救いにあずかることを示すのです。ですから私たちは救われたことを感謝しながら、主のみことばに従い続けていくことです。それはただ私たちがみことばを学んでノートに記してそれで終わってしまうというわけではありません。みことばが教えることを実践する決心をして、それを可能にさせてくださる聖霊の助けを仰ぎながら歩いていくことです。主が私たちを変えて行かれるならば、主が私たちを成長させてくださるならば、私たちはこの世に対して、このイエス・キリストこそが救い主であることを明らかに示していくのです。我々はそうやって生きて行く責任を負っていると言えます。私たちが覚えなければいけないことは、神はあなたを通して、ご自身こそがまことの神であるということを世に示されるということです。そのために私たちひとりひとり、神のみことばをただ聞くだけでなく、実生活で生かしていくことです。みことばに従って生きていくことです。それがなければ私たちの信仰は絶対に成長しない。それがなければ私たちは主が望まれる働きを経験することはできないのです。

## 2. 「選ばれた者の誇り」 29-31節

さて、パウロはこれまで救いは100%神の恵みであると教えてきました。ですから彼は29節「これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。」と言います。つまり彼は救いに関して、神以外に誇るもの、自慢するものがないのだということ、我々の誇りは神だけなのだということを改めて彼らに思い起こさせるのです。そしてパウロは救いに関して、自分のうちに自慢できることは何一つないことを記した上で、私たちが自慢できることは何なのかを教えていこうとするのです。

30節「しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。」とあります。「キリスト・イエスのうちにある」という表現が使われていますが、言われていることは救いのことです。ここで訳者はこのように訳しましたが、この原語はほかの箇所では微妙に違う訳をしています。でも言いたいことは同じです。このことばがどのように訳されているのか、幾つか見たいと思います。ローマ8:1では「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」となっています。つまり救いにあずかった人は罪のさばきを受けることがないと言っているのです。ローマ16:7では「私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです。」、また「キリストにある」と出てきました。このふたりはパウロよりも先に救いにあずかったと言っているのです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」、2コリント5:17を思い出してください。「だれでもキリストのうちにあるなら」と同じことを言っています。英語だったら全部“in Christ”となります。それを日本語ではこう訳しているのです。ですから、言っていることはすべて同じです。「キリストにある者」、つまり救いにあずかっている者たちのことです。

救いによって主との関係が回復された者たち、クリスチャンたちは主イエス様との個人的な、また特別な関係に入れられたのです。イエス様が言われたように、主イエス・キリストを信じた者たちは、神の子どもとされることが約束されたのです。ヨハネ1:12「その名を信じた人々には、神の子どもとされ

る特権をお与えになった。」、救いにあずかった私たちは神の子どもでもあるし、また2コリント10：7には神に「属する者」という表現が使われています。1コリント6：15には「あなたがたのからだはキリストのからだの一部である」とあります。そしてエペソ5：30には「私たちはキリストのからだの部分」とあるという表現を使っていますが、言いたいことは、我々はキリストと特別な関係に入れられたということです。ただキリストのことを知っているといったレベルの話ではなく、個人的に知っているという密な関係の中に我々が置かれているということ、つまり救いの話です。

テキストに戻って、救いの話をするパウロは、ここに「神によって」ということばを記しています。あなた方がこの救いを得たのは「神によって」だと記しているのです。この「よって」と訳されている前置詞は、その「起源」や「源」を意味することばです。救いというのは一体どこから出てきたのか、救いという祝福の出所を教えているのです。この祝福は、決して私たちがみずからの努力で得たものではなくて、神によって与えられたものだということです。人間の知恵や行い、徳を積むことや例えば宗教にどれだけ熱心であったとしても、またどんなに誰かのために大きな犠牲を払おうと、どんなに努力をしようと、どんなに頑張ってみようと、私たち人間は自分自身によって罪からの救いを得ること、天国に入ることは絶対に不可能です。だからパウロは、なぜそんな救いをもたらさないものを誇るのだと言うのです。私たちは救いをもたらしてくださったこの福音を誇りとし、それを備え、恵みでもって私たちに与えてくださった神を誇るのです。真に誇るに値するものだけを、値するお方だけを誇る。ちょうどパウロが「私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」とガラテヤ6：14で教えるように、私たちも声を一つにしてそのように叫ぶことです。私たちの誇りはイエス・キリストの十字架だと。

### 1) 神の知恵

さて、救いのことを教えたパウロは、次に「キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、」と進んでいきます。この「キリストは」ということばは補われているのですが、当然この前からつながっています。「私たちにとって、神の知恵と」なったと。当時のある人々は人間の知恵を非常に重んじ、神の備えてくださった福音を愚かなものとしていました。パウロはこの手紙の中で、人間の知恵が神の前にいかに愚かであるかということをはっきりと示したのです。ですからこうして神の知恵と人間の知恵が対比されているのです。なぜならこの人たちは人間の空しい知恵を誇っていたからです。この30節は非常に訳がむずかしいし、いろいろな解釈ができるのですが、まず初めのところで「あなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにある」、つまり神によって救いにあずかったという話をして、そして「キリストは、私たちにとって、神の知恵とな」ったと続きます。パウロはここでキリストが私たちの知恵なのだ、つまりこのキリストによってもたらされた救いはまさに「神の知恵」であると言っているのです。

その後を見ると、キリストによって私たちが得たものがここに列記されているように見えます。「神の知恵」、「義」、「聖め」、「贖い」、これらが私たちに与えられたと。もっと言えば、キリストが持っておられるその「義」を、キリストが持っておられるその「聖め」を、キリストが持っておられるその「贖い」というものを私たちがいただいたと。確かにそうなのですが、どうもこの文脈を読んでいると、パウロは「神の知恵」がどんなにすばらしいのかを知らしめるために、この三つの名詞を並べているように思えます。また、「キリストは、私たちにとって、神の知恵となり」の「なり」という動詞が、先ほど見てきた三つの名詞と「知恵」に係っているとはどうも思えない。「知恵」にかかっているように思えます。ですから、私たちが神によってあずかったキリストによる救いというのは「神の知恵」であって、そして「神の知恵」であるということが三つの「義」と「聖め」と「贖い」によって明らかになるのだということが、この30節でパウロが教えようとしたことだと思います。その根拠は先ほど説明したこの文脈、原語の並びを見た時にそのように見て取ることができます。ただ、途中でもお話したように、これらのものを神様が私たちに下さったのだと教えていると取っても、言わんとしている内容から外れることはありません。

パウロはこの三つの名詞「義」と「聖め」と「贖い」——これはまさに救いについての核心の部分です——を明らかにここに示すことによって、神様の知恵というものを証明しようとするのです。今朝私たちが見ていきたいことは、キリストにある神の救いがいかに「神の知恵」にあふれたものであるかということです。願わくばそのことを通して皆さんひとりひとりがこの救いを心から誇る者へとさせていただくためにです。

#### (1) 「義」

まず最初に「義」ということばは「正しい」とか「神に嘉納される状態」、また「正義」と訳すことができます。私たちの捧げ物を神が喜んで受けてくださる。ここでは最も一般的なことばが使われています。神の律法の要求をすべて満たしているという意味です。またすべての点において神に受け入れられる状態、それがこの「義」ということばです。神の律法の要求をすべて満たす、だから正しいという

意味なのです。すべての点において神に受け入れられる状態、すべてにおいて正しいと。私たちはこの「義」ということばは、法のもと、裁判官による無罪の宣言であるとよく説明してきました。義なる神様が主イエス・キリストの救いにあずかった者を義なる者と宣言してくださる、まさにこれは法廷の用語であって、裁判官である神がイエス様を信じたひとりひとり、あなたに対して、この人は義なる者である、正しい者であると宣言してくださると。それがこの「義」ということばが持っている意味です。

では、私たちが生まれながらにこのような恵みにあずかるような価値ある存在であったかと言うと、私たちは生まれながらに神に逆らう者でした。ローマ3：10で「義人はいない。ひとりもない。」と教えているように、人類の歴史を振り返ってみて、神の前に全く正しい人、義なる人はひとりもいないと。それは私たちが言っているのではなくて、すべてを知っている神が言われていることです。そんな存在として私たちは生まれてきたのです。では私たちは生まれてきて、神の前に正しいことをして歩んで来たのかと言うと、そうではなくて、同じローマ2：5が「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」と教えています。私たちは汚れた者、神の前に正しくない者として生まれてきた。その私たちが日々の生活を通して神の怒りをますます増し加える歩みを行っているという話をするのです。これまでの私たちが歩みに対して怒っておられる神がいるのです。私たちの悲劇は、私たちがその神の怒りをなだめる術を持っていないということです。どんなことをしても、この神の怒りをなだめることはできないのです。私たちは自分にふさわしい永遠のさばきを恐れながら待ち続けることしかできなかった。

そんな私たちに神が何をなさったのかということなのです。神は、自分で「義」を得ることのできない私たちに神ご自身の「義」を与えてくださった。つまり救われた時に、私たちは「義」なる者とされた。この「義」というのは自分たちが努力で勝ち得たのではなくて、「義」なる神様が下さった「義」なのです。私たちは「義」の転嫁ということを学んだことがあります。我々が神に差し出したのは自分たちの罪であり、神が私たちに下さったものはご自身の義であると。パウロがピリピ3：9で言うように「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義（つまり行いによる義）ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」、まさに私たちはそれをいただいたのです。2コリント5：21でも「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」と書いています。「罪を知らない方」——すべてにおいて正しい方、「義」なるお方が「私たちの代わりに罪とされ」、「それは、私たちが、この方において、神の義となるため」だと。なぜなら私たちは「神の義」をいただいたからです。

救いというのは、キリストの「義」をいただくことなのです。救いの希望の全くない罪人に、神ご自身の「義」を与えてくださる。一体誰がこんな救いを思いつくことができるかと。永遠にさばかれてしかるべき私たちに、神ご自身の「義」を与えてくださる。そして私たちが「義」なる者として救ってくださる。私たちはそこに「神の知恵」を見るのです。私たちが到底思いつくこともない神の恵みのみわざです。

## (2) 「聖め」

二つ目に「聖め」ということばがあります。これは「聖別」とか「心と生活の聖いこと」という意味があります。聖さというのは神の属性、神のご性質です。よくご存じのように「あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。」と1ペテロ1：16に記されていますが、それはレビ19：2から引用されています。聖書は、神というお方はすべてにおいて完全に聖い方であると教えています。そしてこの方のうちにはどんな汚れも存在しない、100%聖いお方です。その聖い神の前に立つことができる人というのは、同じように聖いものでなければならないと。一体どこにそんな人がいるのでしょうか？イザヤが私たちのことをうまく表現しています。イザヤ64：6「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。」と。「汚れた者」、「私たちの義はみな」と書かれている二つの点を見てください。最初の「汚れた者」というのは、どちらかと言うと霊的に汚れている状態を意味しています。私たちの心の中の状態です。「私たちの義はみな」と訳されているこの箇所は、私たちの義の行いのすべてはということです。我々の心だけではない、私たちの行いもどちらももう不潔きわまりない汚染した着物のような存在であると。汚染していて、カビが生えていて、おっついて、何の役にも立たない。もうそれは捨てて処分するしかない。まさにこれが私たち人間の生まれながらの姿であるとイザヤは説明します。我々がすっかり覚えなければいけないのは、私たちのうちに0.何%でも神がお喜びになるようなものが存在したかということ、何にも存在していないということです。イザヤが言ったように、私たちはもう捨てられて、処分されてしかるべき存在です。私たちは人と

自分を比較したら、少しはいいところがあると思うかもしれない。問題は神がそうごらんになるかどうかです。神が私たちをごらんになる時、私たちの本当の姿をごらんになる。神から見たら、私たちの心も行いもすべて汚れている、すべて道から外れているのです。だから私たちがこの神の前に立たせていただくならば、私たちはこの方によって罪が聖められる必要があるのです。

そして神は恵みによって、そのことを可能にしてくださったのです。コロサイ 1 : 22 では「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。

(救いにあずかった話です) それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるため」だと。私たちが救いにあずかることによって、私たちは聖められて、聖い神の前に立つことができるようになったと。イザヤ 1 : 18 で「『さあ、来たれ。論じ合おう。』と主は仰せられる。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。』と。あなたがどんなに罪深くても神はそれをすべて聖めてくださる。これが神の備えてくださった救いです。旧約の時代だったら、大祭司が年に1回しか至聖所の中に入ることができませんでした。彼らは動物のいけにえの血を持って神の前に立ったのです。私たちは動物の血を持って神の前に立つのではない。私たちの上にはイエス・キリストの血潮が塗られているのです。このキリストの血潮によって、この犠牲によって、年に1回ではない、私たちはいつでも、1日に何十回でも何百回でも神の前に立ち、神と語ることが赦された。なぜかという、私たちは神の恵みによって罪を赦していただいたからです。聖めていただいたからです。

### ◎ 聖め：神のご性質にあずかる者とされた

この「聖め」に関してぜひ皆さんに覚えておいていただきたいことがあります。2ペテロ 1 : 4 を開いてみてください。「その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」、救いというのは、私たちは「神のご性質にあずかる者」とされたということです。このことは私たちに大切な二つのことを教えています。一つは立場的な「聖め」です。私たちは新しい身分を得たということです。もう一つは漸進的な「聖め」です。これは日々の生活で体験するものです。

#### ① 立場的聖め：新しい身分を得た 1コリント 6 : 11

私たちが主イエス・キリストによって罪を聖めていただき、罪の赦しをいただいた。それはまさに私たちが「神のご性質」をいただいたということです。聖い神様がその聖さを私たちに与えてくださった。我々クリスチャンというのは、イエス様の「義」が転嫁されただけではないのです。イエス様の聖さも私たちに分与されたのです。私たちに主ご自身の聖さが与えられたのです。ですから、救いということは1コリント 6 : 11 がこう言っています。「あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められた」と。つまりイエス様を信じた時に、罪に汚れたあなたを神は洗ってくださって、聖い者にしてくださって、そして神の前に立つことができる者にしてくださった。この身分、この立場は永遠に変わることがないのです。ですから救いにあずかった人たちが救いを失うことは絶対にはないのです。救われていると思っ込んでいるだけの人が神から離れて行ってしまふ。救われていなかったのですからそれは当然のことです。でも神によって救われた人はこの救いから離れることも、漏れることも絶対にはない。なぜならその人は新しい身分を神によって与えられたからです。その人は神によって聖い者にされたのです。

#### ② 漸進的聖め：日々の生活で体験するもの

ただ、神のご性質にあずかる者になった時に、私たちは漸進的な「聖め」というものも同時に覚えておかなければいけない。私たちは日々の生活においてこういったことを経験するのです。

##### ・「主に似た者へと変えられる」 コロサイ 3 : 10

我々は日々の生活において主イエス・キリストに似た者に変えられていくということです。その働きが我々のうちに既に始まっているのです。コロサイ 3 : 10 に私たちは「新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。」とあります。つまり神のご性質にあずかる者となり、主から主の聖さをいただいた。聖さをいただいた私たちは日々の生活において主に似た者に徐々に変えられていくということです。それを今皆さんは体験されているのです。それを我々は聖化と呼んでいます。日々の生活を通して少しずつイエス様に似た者に変えられていく。あなたは確かに立場として聖い者にされ、永遠に神の前に立つことが赦されたのです。そして日々の生活において私たちは神の憐れみによってよりキリストに似た者に変えられていく。

##### ・「罪に対する勝利」

私たちは日々の生活を通して罪に勝利することを日々経験していくのです。イエス様を信じた人は神様の聖さをいただいているながら、残念ながらこの地上において罪との葛藤をいつも経験しているのです。立場的に身分として完全に聖いものにされた。そうすれば私たちは罪を犯すことがなくなったかと

いうとそうではありません。我々は日々の生活で悲しいことにいろいろな罪を犯します。では何が変わったのかというと、我々はその罪のうちを継続して歩み続けることがなくなったのです。「だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。」、罪を犯さないと言っているのではないのです。罪のうちを継続して習慣的に歩み続けることがなくなったということです。「なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができない」、1ヨハネ3：9です。今、あなたの話をしているのです。救いにあずかったあなたは、イエス様を信じた後と信じる前を比較した時に、信じた後も信じる前と同じようなことをしてしまうのです。神はあなたを聖い者としてくださり、聖い神の前に立つことが赦されたのです。しかし同時に、日々の生活において私たちはこの罪から聖められていくことが必要なのです。救われる前はいつでもよかったし、全く考えなかった罪について、信仰に至ってから私たちはそれについて考えるようになったのです。罪の中を平気で歩み続けることができなくなったのです。罪を犯したらそこから離れようとするのです。

ペテロがこう言っています。「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。」(1ペテロ1：15)と。これは立場的な話をしているのではない。日々の生活においてますます聖められていきなさい、ますますイエス様に似た者に変えられていきなさい、ますます罪から離れてそれに対する勝利を得なさいと言っているのです。神のご性質をいただいて、神の前に立つことができた私たちは、この地上にいる間、罪との戦いが続くのです。でも救われた私たちは今までとは違って、罪の中を継続して習慣的に歩み続けることはできなくなったのです。なぜならヨハネのことばを借りれば、「神の種がその人のうちにとどまっているから」です。あなたのうちに神がおられるゆえにそういう歩みができなくなったのだと。最初に「聖め」の意味を説明した時に「聖別」と言いました。神のために、神に仕えていくために聖別されたのです。

まとめるとこういうことです。日々あなたが主に似た者に変えられ続けることによって、この世にあって主に逆らい続けている人に、彼らの間違いを示していくこととなります。あなたを通してこのイエス・キリストこそがまことの道であり、真理であり、唯一のいのちであることを神は証明していけます。こうして神はあなたを用いてくれるのです。こうして神はあなたを使ってご自身のみわざをなされるのです。ですからあなたは神のために聖別されたのです。神によって用いられる者として生まれ変わったのです。この救い、特にこの「聖め」を見た時に、罪に汚れ、染まった私たちに神様はご自分の聖さを分与してくださった。そのことによって私たちは神の前に立つことができる聖い者へと変えられたのです。しかも日々の生活において主に似た者へと変え続けてくださると。そしてそんな私たちをご自身の証し人として用いてくださると。汚れたもの、捨てられて当然のものを聖めてくださり、日タイエス様に似た者に変え続けてくださり、そして神にとって役に立つ者として用いてくださる。これがこの神様がなしてくださった「聖め」なのです。一体誰がこんなことを思いつきます？私たちはこのことばを見ても、そこにある深遠な神様の知恵を見ることになるのです。

### 3) 「贖い」

これは代価を払って買い取るという意味です。その結果、その人を自由にするという意味です。主が尊い代価を払ってあなたを買い取ってくださった。それが「贖い」ということです。ペテロは1ペテロ1：18-19で「ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」、確かに奴隷だったら金銀を払って買い取ることができました、贖うことができました。でも私たちが罪から贖うためには、どんな金銀も役に立たなかったのです。そのために主はご自身のいのちという代価をもって、私たちがそこから贖ってくださった。同じようにパウロも1コリント6：20でこう言います。

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」と。贖われた皆さん、主がご自身のいのちという代価を払ってあなたを罪から救ってくださった。そして贖われたあなたに言いたいことは、あなたは贖われることによって神の栄光を現すという創造当初の目的に沿って生きることができる者へと変わったのです。そのために神は私たち人間を、すべての被造物を造られたのです。でも罪によってそれができなくなった。しかし、救いにあずかることによって、その本来の目的に沿って生きる者へと私たちが生まれ変わらせてくださったのです。

皆さんに聞かなければいけないのは、あなたは実際に神の栄光を現しながら日々の生活を送っておられるかどうかです。すべてのことを神の栄光のためにしておられるかと皆さんに問いかけたとしたら、私も含めて悲しくなってくる、情けなくなってくる。なぜかというと、神の栄光を現すどころか神の栄光を汚しながら生きることが多いからです。しかし、そんなことをすべてご存じの神は、私たちに希望を下されたのです。どんな希望かということ、それは罪を犯すことの決してない栄光のからだをいただくという希望です。その日を待ち望みながら、きょう私たちは主に従っていくのです。罪に負けたらそれを告白し、聖霊の満たしをいただきながら、我々は備えられた主の力と助けによって前に進み続けてい

くのです。「贖い」ということ見た時に、主はご自身のいのちという最も高価な尊い代価を払うことであなたや私を罪から救い出して生まれ変わらせてくださった。それだけではない。後には栄光のからだをいただき、この不完全なからだを罪から解放してくださるのです。今私たちはこうして聖書を通して神のご計画のすべてを知ることができます。一体誰がこんなことを思いつくことができますか？

まさにキリストによる救いには「神の知恵」を見ることができるとパウロは私たちに教えるのです。どんなに努力をしても神の前に完全に正しくなることのない私たちに、神の正しさを与えてくださった。そして義なる者としてくださる。どこから見ても汚れた存在である私たちに神の聖さを与えてくださり、日々の生活において私たちがイエス様に似た者に変えることによって、どうしようもない私たちが神は用いてくださり、ご自身の栄光を現してくださると。尊い神のいのちが支払われたのです。それによって私たちは罪から贖われた。それでいて私たちは神の前に罪を犯し続けている。でも私たちはこのままで終わらない。神はこのからだからも贖う日を備えてくださっている。これが神様が私たちのために計画されたことです。これが神が備えてくださった救いです。「神の知恵」にお気づきになりませんか？私たちが想像もできない、考えることもできないことを神はしてくださったのです。

そこでパウロは改めてこの「神の知恵」をコリントのクリスチャンたちに教えた後、エレミヤのことばを引用してこう言うのです。31節「まさしく、『誇る者は主にあって誇れ。』と書かれているとおりになるため」だと。この「まさしく」というのは「それだから」と訳せることばです。まさにパウロがこれが「神の知恵」なのだから、この方だけを私たちは誇り続けていくのだと。主を誇れというのは現在形の命令形です。このように継続して誇り続けていきなさいと教えます。私たちは一体何を誇りながら生きるのか、誰を誇りながら生きるのか——。私たちが誇るべきお方は私たちの神です。このすばらしい福音によって私たちは救われたのです。ですからこの福音を私たちは誇るのです。私たちがいつも覚えていなければいけないのは、このイエス様が私たちのために何をしてくださったのかです。あなたや私に救いをもたらすことができになる方はこの方だけなのです。

### ◎ イエスが賛美される理由

ヨハネが天におられる小羊イエスを天使たちと救われた者たちが賛美している光景を見ました。着座されているイエスを天使たちが、救われた者たちが賛美している光景です。なぜ彼らがイエスをほめたたえているのか——。その理由をヨハネは賛美から学びます。黙示録5：9-10に「あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。」とあります。なぜ彼らがこの小羊イエスをたたえていたのか——。三つの理由がありました。

#### ① 「身代わりの死」ゆえに

一つはこの方が身代わりに死んでくださったからだ。と。「ほふられて」ということばがあります。いけにえが罪人の身代わりとして殺されたように、神のいけにえである主イエス・キリストが我々罪人の身代わりとなって十字架で死んでくださった。この方が私の罪のために、私の身代わりとなっていけにえとして死んでくださった。だから彼らはたたえたのです。

#### ② 「いのちという代価」ゆえに

二つ目にいのちという代価を払ってくれたゆえにです。「贖い」ということばが出ています。神ご自身がご自分のいのちを私たちが救い出すために犠牲としてくださったと。いのちという最も高価な代価を払ってくださることによって私たちは救いにあずかったのです。だから私たちはたたえるのだと。

#### ③ 「救い」ゆえに

三つ目は救いです。「この人々を王国とし、祭司とされました」とあります。「王国とし」ということばは、神の王国に属する者としてくれたということです。「祭司」としてというのは神の祭司として彼らが生まれ変わったことを、また神の前に立つことが赦された存在だということです。つまり彼らが救われたということです。

この天使たちが、救われた者たちがなぜ小羊イエスをたたえていたのか——。そしてイエスを礼拝していたのか——。それはこの方が約束の救世主であり、その使命を十字架で果たされたからです。彼らはこう賛美するのです。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」と。このイエス・キリストに「賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように」（黙示5：13）と。そして、それを聞いた時に、彼らは神を礼拝するのです。そして14節「四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して（この方を）拝んだ。」と。ヨハネは天でこのような光景を見るのです。まさにこれこそ私たちがこの地上にいて、今することです。私たちはこの方、このイエス・キリストをほめたたえるのです。なぜならこの神である主イエスは、あなたや私の身代わりとして十字架で死んでくださったゆえに、ご自身の罪のないいのち、最も高価な代価をあなたや私のために払ってくださったゆえに、そして、あなたや私を罪より救いだしてくださったゆえに、この方だけをたたえるのです。救い主はイエス・キリス

トだけです。称賛に値する方はこの方だけです。この方を誇りながら生きる。それが救われた私たちの生き方です。そのように生きなさい。感謝しながら、この方を誇りながら、私たちはこの方に従い続けていくのです。そして願わくば憐れみ深い神が私たちを使って、このイエス・キリストがまことの神であることを、救い主であることを周りの人々に示してくださる、主よ、どうかそのために私を使ってくださいと。その思いを持ってこの1週間も置かれているところでしっかりと主に仕え続けてまいりましょう。